

第1回 10月23日(金)

「ヒンディー語の辞書 -- 最古のヒンディー語辞書」

講師：町田和彦 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授

ヒンディー語は、言語の系統からはインド・ヨーロッパ語族インド語派に属します。そのためヒンディー語は英語、フランス語、ロシア語などの遠い親戚にあたるといえます。現代のヒンディー語はインドの公用語として、また5億人を超える母語人口を擁する大言語として知られています。

ヒンディー語の辞書は今日までインド人またインドと関わった外国人の手により、さまざまな目的に応じて、さまざまな体裁や規模のものが作成されました。文書のデジタル化が進んだネットワーク時代の現在も新しいニーズに応えるヒンディー語辞書が作られ続けています。

今回は、ヒンディー語の辞書の歴史の中で「最古のヒンディー語辞書」と考えられるものに焦点を当てながら、辞書を作るということの周辺について少し考えてみたいと思います。問題の辞書は、17世紀の末(1698)にオランダ東インド会社のケテラール(J. J. Ketelaar)の手になる『ヒンドゥスターニー語文法書』に附属するヒンドゥスターニー語・オランダ語語彙集の部分です。「ヒンドゥスターニー」とはペルシア語で「ヒンドゥスターン(インド)の言語」という意味で、ヒンディー語やウルドゥー語に対する当時広く使われた呼称です。この語彙集は正確にはオランダ語・ヒンドゥスターニー語・ペルシア語3言語対訳語彙集の体裁になっています。これらの3言語はいずれも私たちには既知の言語であるため、内容を理解する過程では「ロゼッタ石」解説の際のような特別な苦労はありません。ただ「言語のタイムカプセル」という意味では同じで、正確に読み解くにはそれなりに困難があると同時に、当時の言語(この場合は語彙)と現代の言語とのミッシングリンクを埋める可能性がある点では魅力的な作業といえます。いずれの言語の表記も手書きラテン文字(ローマ字)で、当時のオランダ語の正書法に従っています。つまりこの語彙集あるいは辞書の解説は、発音と表記の相互関係を把握することから始まります。また当時のヨーロッパ人には未

知だった無気音と有気音の対立やそり舌音をどのように「聞き取った」のかも興味のあるところだ。

奇しくもこの3言語はすべてインド・ヨーロッパ語族に属する同系統の言語だ。この知識を現代の私たちはもっていますがケテラールの時代はなく、結果的に比較対照リストとなっているこの作物に彼が語彙集以上の意味を付与した形跡は見当たらない。共通の祖語から分かれ独自の発展を遂げた諸言語をまとめる「語族」という概念が初めて示唆されるのは約100年後のことだ。